

＜ビバリー・モーニング25-2＞第374空輸航空団、空輸能力を発揮 374 AW demonstrates aerial port capabilities during BM 25-2

March 28, 2025

By Senior Airman Jacob Wood
374th Airlift Wing Public Affairs

3月6日、第374空輸航空団は、小規模の機材輸送部隊を三沢基地に派遣した。

この派遣に参加したのは、乗員、憲兵、通信、指揮統制、空輸支援といった各種の専門職から構成され、加えて統合装備監査官も同行した。

第374憲兵中隊のチャールス・ボウマン曹長は、「チーム一丸となって、フォークリフトと指揮統制機材を三沢に輸送した。輸送のチームリーダーとして、部隊と機材の管理責任を担い、現地では貨物の検査や燃料補給、積み替え、通信機の設置、警備など、各専門職の担当作業を指揮した」と自身の役割について述べた。



この任務は、演習「ビバリー・モーニング25-2」の一環として行われ、模擬の緊急事態下での対処力を実証した。

第374装備即応中隊司令チャールス・コフマン中佐は、「空輸専門官(2T2)は、空港機能が限られた場所でも迅速な対応が求められ、ハブ(中心拠点)とスポーク(拠点)間の運用を担っている。今回の三沢での訓練は、横田から前方作戦拠点への輸送を迅速に自己完結式に行う、新たなロジスティック・コンセプトを実践する貴重な機会となった」と述べた。



この任務は、第374空輸航空団が独自に推進する迅速機敏な戦力展開(ACE)の取り組みの一環である。同航空団司令官リチャード・マックエルハニー大佐は、以前、第36緊急事態対応群(CRG)を指揮した経歴を有し、この分野に精通している。

「我々の目標は、チームを前方作戦拠点に派遣し、飛行場を開設して航空機の受け入れを始めることだ。現地では全ての貨物を搭載・降載するまでそこに留まり、その後、帰還するか次の前方展開地に向かう」とマックエルハニー大佐は説明した。

現在のチームは、機動司令部の指揮下にあり、CRGと似た運用を行うが、持続性の面で異なる。

マックエルハニー大佐は「CRGとの主な違いは持続力で、今のチームは、『ヒット・キット』と呼ばれる食料や水、必要装備をまとめたパッケージを使い、72時間の活動が可能となっている」と述べた。

将来的には、第36緊急事態対応群から即応隊員を横田基地に配備し、緊急事態対処能力をさらに強化する計画だ。

最後に大佐は「この能力とCRGの専門性を組み合わせれば、ほぼ追加コストなしで、太平洋空軍にとって有効な人道支援・有事対応力を確立できる」と述べた。